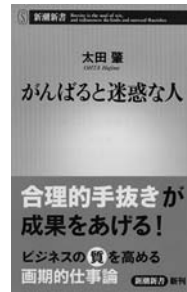




『がんばると迷惑な人』

太田肇 著

新潮新書 720円＋税



「がんばる」——。一日に何度聞かされるだろう。「自分ががんばらなきゃいけない人ほど人ががんばってと言うよね」とかつてタモリが話しているのをテレビで観たけれど、それは別のことである。

タイトルを見て、確かにそうだなあと考えた。誰より自分に対してそう思う。いくぶんライオンな感じのタイトルだが、どこまでも真面目な仕事論、チーム論である。

がんばるというワードには確かにひっかかるところがこれまでもあった気がする。著者は「がんばり主義」として、日本で蔓延する時代遅れの考え方とする。

確かに時代遅れだと思う。日本人ががんばっていたのはいつのころだったか。

たぶん戦後復興から高度成長、そしてあの「輝かしい」パブルの時代——。いずれもみんなが「がんばった」成果だった。

た。それもあって、がんばるというのは日本人にとってイデオロギーを越えて一つの教義になったているのかもしれない。誰もががんばれというプレッシャーに圧倒されながらも、みんなで何かに邁進する快さを知っている。がんばるというの

は、一人ですることではなくて、集団があつての精神的姿勢なのだと思う。

この本の基本認識は、この日本社会の集団主義がもはや生産性を保証しないどころか、逆機能にさえなっているという点にある。

確かに、工場はコンピュータで自動化されているし、社員の大半は目の前のスマホで情報を

「がんばらないほう」が生産性は上がる

コントロールしている。一昔前は大量の書類のやりとりで数か月を要していたものが、下手をすれば地球の裏側とメールで瞬時にやりとりできるようになっている。

自分自身を振り返っても、細かいことはずいぶん手を煩わせる必要がなくなっている。楽になつていく。

そればかりかSNSのように組織を介さず直接発信したりなども日常の一部となっている。

これらは物資を価値の源泉にしているわけではないから、量的な転換というよりも質的な転換である。

ならば、質的なことをどう有効に行うかに力を傾けなさいというのが主張のポイントとなる。つまり、時代の原則が変わったにもかかわらず、戦後の美徳を貫徹してしまうと、「迷惑」なのは当然すぎるほど当然だ。

「いかに早くいかに多く」が勝負だった時代から、「いかに美しくいかにやさしく」が勝負になつてきているのだろう。

後者は質であるから、人間にしかできない。だからといって個人プレーのみということではない。反対である。質の探求こそがチームプレーでなされるべきことである。

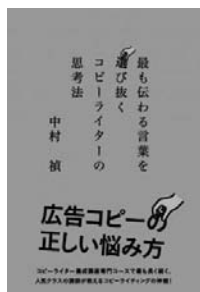
そのためには同質性ではなく、異質性を核にしたチームが意味をもつようになつてくる。たぶんまだ日本社会は質を中心とし、かつ異質性を利用するような組織の運営に慣れているだけなのである。なぜなら、同質性やがんばり主義で生産性を代用してそれで成功してきてしまったからである。

やっかいなのはがんばりというのとは心の中にしつこい規範として残っているということである。強固に内面に築かれた壁は取り払うのがなかなかむずかしい。たぶん日常の小さな行動以外に壁をなくすアプローチはないのだろう。



『最も伝わる言葉を選び抜く 「コピーライター」の思考法』

中村 禎 著
宣伝会議 1700円＋税



二昔以上前のバブルのころ、「コピーは詩を超えた」みたいなことが言われたことがあった。経済的な繁栄が、確かにコピーライティングの価値を大きく前進させたのは間違いないだろう。

現在、コピーを文学だと言う人はいない。むしろそれくらいに、時代は現代になって、通常の人々が、自らの言葉を公共空間に発することが当たり前の時代になっているということでもある。

コピーライターによる本である。コピーなど自分には関係ないなどというのは一昔前の話、今は誰もが「言葉づくり」に日々関わらざるをえなくなっている。

仕事でも、書類などではちよつとした言葉遣いのセンスは要求されるし、メールの文面や人と接する際にも言葉の技術が成果を大きく左右するのはまぎれない事実である。といっても、コピーの書き方

についての教科書的な本ではない。コピーライターという一人の人間との血の通った物語が端々に浸透していて、読み終えたときに、いい温泉に浸かったような感覚さえ湧いてくる。

言葉は価値の源泉

もちろん、著者の代表的な仕事や作品、そのプロセスまでについて書かれている。言葉というものをどう商品として価値あるものにするか、その考え方が鮮やかに示されている。しかし、それ以上に私が切実に感じたのは、現在ある多くの仕事とコピーライティングとの共通性である。たぶんコピーライティングが

一つの職業として成立したのは、それほど昔のことではないだろう。かつては、商品をつくって販売する人たちが、自社でコピーを考えていたはずである。だが、私たちが現在広告として目にするコピーは、「プロ」によって考えられたものである。考えてみれば、ツイッターやブログなど現在氾濫している「言葉」のなかで、商品としての言葉を紡ぎ出すのは大変なことと言わざるをえない。

本書でもネット上に流れる言葉とコピーとの関係性には慎重な配慮が払われている。そして、それ以上に配慮が払われているのは、書き方ではなく、書くときの姿勢という向き合い方みたいなものである。昨今、世には読み切れないほどの本があり、ウェブ情報がある。知識は大量に流通している、とうてい消費しきれないほ

どの規模に達している。そのなかで、しっかりと価値を生み出しているのは、つまるところ、考え抜かれたもの、すなわち、思考の力なのだということに思いついた。

コピーライターが生み出すのは、ときには数文字の言葉である。数文字であつても、ときにすぐれた映画を見たときのように、心の中にカラフルで情感豊かな映像がほとばしることがある。凝縮された言葉にはそれだけの力があるのだ。

あるいは、そこまで言葉にかかわる活動はしていないという方もいるかもしれない。だが、コピーライターの「思考法」はつねに参考になる。なぜなら、言葉とは一つの錬金術である。言葉そのものが商品となり、価値の源泉となる。それがこの世界の一つの現実である。これは知識社会の基本原則そのものであつて、言葉という高度な人間活動が価値創造の源泉たりうるということである。興味深くはないだろうか。



『40歳を過ぎたら、働き方を変えなさい』

佐々木常夫著
文響社 1420円＋税



評者は40歳を過ぎて数年になる。いろいろ思うところがあった——いろいろ思うところのない年齢などあるのか——、この本を手にとってみた。佐々木常夫さん——。著名な著者とのことだが、本を読むのは初めてだった。

読んでみて、学べるところがあつたかと聞かれれば、大いにあつたと思う。

会社人生というと不自由の多い生活が想像されるけれども、ちよつとした工夫や、考え次第で、それはとてもいろいろなことを教えてくれる。

書き手の人柄のよさや温厚さとともに、そんな成熟した知恵が具体的な事例とともに、伝わってくる、そんな一冊である。

誰もが、40歳までは無我夢中である。仕事は覚えなければならぬし、人間関係の作法も身に付けなければならぬ。山のようにやることがあつて、多くは疲弊する。とにかくがつがつ

したりあくせくしたりしがちで、それもある程度はしかたがないように感じる。

しかし、40歳を過ぎて同じことをしてはいけないう。この警句はとても心に響く。

「略す」技術

く。確かにそのとおりだし、生き方は常に同じである必要などない。40歳で生き方を変えよというのとはとても重たいメッセージだ。

にもかかわらず、話されるのは、とてもライトで清涼感のあるものばかりである。

たとえば、次のようなものだ。・周囲とは「さっぱり」と付き合

・いやな上司は「人間だからしょうがない」で許す。
・生産性の低い飲み会は略せ。
・新聞は読むな、眺めよ。
・家族への愛は「家事」で表現する。

目にしてみるとみんなシンブルなことである。

読んでいて、もつと若いころに知っておけばよかったと思う人も少なくないかもしれない。知つてもあまり役に立たないと

いうか、価値が身に浸みない種類の知恵というものもあるのだ。この本に書かれているのはその種類の情報である。

経験という風雨に洗われなければ見えてこない風景というのが確かにあるのだ。そのことに思いがいたる。

いや、それ以上にこれまで重ねてきた苦労が、無駄ではなかったのだという気持ちになつ

てくる。

語り口が絶妙に利いてくるのがその点である。なぜか、自分でも今すぐにできそうな気がするのだ。

これはやはり、書き手の「徳」というものだろう。あるいは「愛」と言ってもいい何かかもしれない。

同じことを別の著者が言つても、たぶんあまり説得力がないかもしれない。

少なくとも、ちよつとした自慢のように聞こえるところが出てきそうなものだが、この本にはそのようなものはまったく感じられない。漂う空気が終始どこまでも清澄なのである。

しかもこの本の説得力はとても静かである。

穏やかに力づけてくれる。一冊の本で人の考え方が変わることはそう多くはない。

けれども、時々この本のようにな、とても静かな言葉を通して、著者のたたずまいから何かを教えてしまうという本があるものである。



『発想法——創造性開発のために』

川喜田二郎著

中公新書 720円＋税



昔のベストセラーを手にする
と時々ほっとするような何かが
下りてくることがある。

同時に、人が追い求めるもの
は、時代によっていくらかのま
だらはあるけれども、大きくは変わ
らないことにも思いがいたる。
約半世紀前にベストセラーとな
り、世を圧するほどに広まった
知的生産の技術、それがKJ
法である。

このような「古典」が現代に
おいて復刊されるのはとても興
味深いことだし、手にとってみ
ることで、半世紀前の人々に対
話をするような、えもいわれぬ
感慨をもつことになる。

著者は高名な文化人類学者で
あり、知の達人である。

著者のイニシャルを冠するKJ
法は、実際に内容を徹するほ
どに、古さを感じさせず、むし
ろみずみずしいほどの知の奔流
に触れた思いを抱かせてくれる。
その実際のなアプローチや方
法などについては、ここではふ

れない。それは一読して関心が
あれば、全面的にとはいわずと
も、役に立つところを採用すれ
ばよいと思う。

それよりももっと大切で、時
代を超える叡智はほかにある。
それは知に対する根本的に謙
虚で、ひたむきな姿勢にあるの

ではないかと思う。

特に、KJ法をめぐる知の背
景を書いた第1章の「野外科
学」についての説明は、半世紀
前よりも、むしろ現代において
その説得性をさらに高めている
ように思われてならない。この
章だけでもぜひ一読いただきたい
と思う。

では、野外科学とは何なの
か。著者は知のありようを、書

名著 復刊

齋科学など、いわゆる現実の観
察を経ずして成立してきたもの
と対置させる。そこで重要な
は文献と推論であり、結果とし
て極端な定量化や観念論が現実
の知を圧倒し、優位を維持して
きたのは無理からぬところだ
った。

もちろんそれらの学問はとて
も重要であるし、役にも立つ。
だが、そこに野外科学の考え
方、すなわち実際の観察と経験
を重視し、しかも自然か人工物

かを問わず、ありのままの現実
に真率に対峙する姿勢の大切さ
を説く。

たとえば、著者は、「経営の
コンサルタントがある企業、職
場を研究する。その職場は、そ
こだけにしかない野外的自然で
あり、個性的な世界である」と
いう。

この一回限りの現象の中にひ
そむ固有性に目をとめるところ

が、KJ法の基礎をなす大切な
考え方のように思われる。
現在もなお、さまざまな発想
法や仕事術があるけれども、お
そらくはKJ法ほどの卓越した
ビジョンをもつものはほとんど
ないに違いない。

方法については高度にアナロ
グであって、現代人からすれば
とてもまどろっこしく面倒に見
えるに違いない。確かに、情報
ツールが格段の発展を見る現代
にあつて、はるかに効率的なア
プローチも可能なものかもしれ
ない。あるいはAIのように、生
身の人間を介することのないア
プローチすら考えられるかもし
れない。

だが、つまるところ、情報と
は、それらを総合しなければ役
に立つ知識に変換されることは
ない。

おびただしい方程式を無限に
解こうとも、一つの総合的思考
を得ることは容易ではない。

「今だからこそのこと」
が、どれだけあるかが名著の条
件なのだろう。



『定年後——50歳からの生き方、 終わり方』

楠木新著
中公新書 780円＋税



特定の年齢に偏るのではという批判もあるかもしれない。「いや、僕はまだ40歳になつてないんで、関係ないし」。ちよつと待つてほしい。定年後とは、定年になるずっと前から考えておくべき課題であるためだ。

定年後を扱うにも、実に多くのアプローチがある。政治問題ともとらえられるし、行政や福祉の問題とも考えられる。むしろ社会の問題であり、何より経済の問題である。だが、ひとつ忘れがちなのは、定年とは誰とも「個別的に」関係をもつ事柄ということである。

生きていれば誰でも年をとる。だが、年をとるという事実ほどしばしば放念されがちなものはない。

現に私の知人でも、あるとき突然定年になった気がすると言っていた人が何人かいる。誰も彼らを笑うことはできないだろう。誰にとつても、定年

など未来のどこかにあるものにするにすぎないからだ。

最大の魅力は、その低い目線と謙虚なスタンスである。どの話題も、ほとんどが一人称かそれに近い目線で語られていて、

「助走」を今はじめる

安心感がある。その生のヴォイスが読む人を安心させてくれる。

ポイントには、定年を迎えた後の人生は、人が思う以上に重要、それどころか、人生では致命的な意味をもつということである。現に今、そのことを日々実感している定年後の人々が

日々自分の居場所を求めている。教えてくれることは実にシンブルだ。定年後とは、定年前の

助走、すなわち現役のときにどう準備するかの問題でもあるということである。

そして、その準備次第では、定年そのものを無効化できるかもしれない。印象的な部分を引用しておこう。

「元氣な人の共通項を探ってみると、教育関係に取り組んでいる、若い人に何か役立つことを持つている、若い頃の自分をもう一度呼び戻している、などを挙げるのができそうだ。ま

た会社の仕事だけではなく、それ以外の何かに取り組んでいる人という条件も重要ではないかと感じた次第である」

ほんの少し前までは、会社や役所が人生のリスクの防波堤になっていたし、多くの場合、終身雇用が機能していた。平均寿命もさほど高くなく、そもそも老後という期間自体が長くなかった。

だが、現在は街ゆく人を一目見るだけで、中高年以上の人々が社会の中心になったのがわかる。多くは元氣で若々しく、社会との接点を求め、居場所を求めている。

つまるところ、それらは行政や経済などの制度の問題というよりは、一人ひとりの生き方の問題なのだ。しばしば「第二の人生」とも言われる。

本書が言うように一次方程式で人生を解ける時代ではない。ならば、なるべく早くから第二の人生の助走を開始するほどに現実的な作法はないと言つてよいだろう。

そして、そのアクセスポイントは、極度なまでに現実的でささやかなものでなければならぬ。地域活動といつても一様ではなく、しかも簡単ではないに違いない。ならば、時間をかけて、ゆつくりとささやかに進めていくほかにはないか。そんな大事なことを示唆してくれる一冊である。